様式第９号

学位審査結果報告書

学位申請者氏名　馬場一英
学位論文題目
咬合指示の違いが咬合力および咬合接触面積に及ぼす影響

審査委員（主査）　細川隆司　印
（副査）　清水博史　印
（副査）　志賀百年　印

学位審査結果の要旨

学位申請者である馬場氏は，患者に咬合を指示する際の言葉の違いにより患者の受け取り方が異なることで、術者の望む咬合状態を再現できない場合があるという臨床上の問題点に着目し，3 通りの咬合指示による咬合力および咬合接触面積を比較検討した研究を行った．方法としては、顎運動機能に問題のない正常有歯顎者の被験者 30 名に対して，「お口を閉じてください」，「噛んでください」，「しっかり噛んでください」の 3 通りの言葉で咬合を指示した後，咬合力および咬合接触面積を測定したもので，得られた結果は以下のようなものであった．

1.　咬合力は，「お口を閉じて下さい」，「噛んで下さい」，「しっかり噛んで下さい」の順に有意に増加し，「お口を閉じて下さい」と指示したときの咬合力を 1 とすると「噛んで下さい」では約 2 倍，「しっかり噛んで下さい」では約 4～5 倍であった．

2.　すべての咬合指示において男性の方が女性よりも咬合力が有意に大であった．

3.　咬合接触面積は，「お口を閉じて下さい」，「噛んで下さい」，「しっかり噛んで下さい」の順に有意に増加し，「お口を閉じて下さい」と指示した際の咬合接触面積を 1 とすると，「噛んで下さい」では約 2 倍，「しっかり噛んで下さい」では約 3 倍であった．

4.　すべての咬合指示において対象者間のバラつきが大きかった．

以上のことから，術者が発する咬合指示の言葉のニュアンスは理解できているものの，果たしてどのくらいの咬合力で噛めばよいのかという解釈は，対象者により異なることが明らかになった，とする結論を得たと申請者は審査会において報告した．

公開審査会においては，本研究の新規性や学術的意義，異なる方法で咬合力の測定を行っていることの妥当性，対象者間のバラつきという結果を得た根拠やその解釈，関連する研究の文献的考察などが問われたが，申請者からは概ね適切な回答を得た．

以上のことを踏まえ，主査および副査２名は，馬場氏の提出した上記論文は，学位申請主論文として価値あるものと判断した．